様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｈ０３４８９

研究課題名（和文）物語文化圏としての東南アジア－２０世紀前半の映画の製作・流通に見る越境性と混血性

研究課題名（英文）Hybridity and Border-Crossing in Producing and Circulating Films in 20th Century Southeast Asia

研究代表者
山本　博之（Yamamoto, Hiroyuki）

京都大学・東南アジア地域研究研究所・准教授

研究者番号：８０３３４３０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,800,000円

研究成果の概要（和文）：20世紀半ばの東南アジアで、どのような出身と経歴を持つ人により、どのような映画が作られ、人々はどのような映画を見ていたかを調査した。シンガポールの映画館での上映映画のデータを作成した。また、ラオス、カンボジア、タイに共通して見られる伝承「12人姉妹」が、文学や教科書や映画を通じてそれぞれの国民に共有される様子を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
20世紀半ばの東南アジアにおける映画産業の拠点の1つであるシンガポールにおいて、地元制作の映画だけでなく、アメリカ、イギリス、インド、インドネシア、香港などで制作された映画のどの作品がシンガポールの劇場で上映されていたかを示したことは、20世紀半ばの国際的な映像メディアの流通およびそれに伴う国境を越えたナラティブの共有を明らかにするという意義がある。

研究成果の概要（英文）：By compiling data on films shown in Singapore's theatres, the project revealed the types and content of films produced and released in Southeast Asia in the mid-20th century. The project also revealed how the “twelve sisters”, a common folklore of Laos, Cambodia, and Thailand, was shared with the public through literature, textbooks, and films.

研究分野：地域研究

キーワード：東南アジア　映画　物語文化圏　越境　混血

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

東南アジアでは ASEAN（東南アジア諸国連合）を通じた地域統合が進められているが、民衆レベルでの東南アジアの統合についてはどのように考えればよいのか。本研究はこの問題関心にナショナリズム研究からアプローチを試みる。

東南アジアのナショナリズム研究は植民地からの独立革命の側面を強調してきた。これに対し研究代表者は、北ボルネオ（現マレーシア・サバ州）の脱植民地化過程を研究し、ナショナリズムに〈まとまり〉と〈戦い〉の二面があると論じ、また、国民・民族の形成過程において越境者や混血者が果たした役割を明らかにした。20 世紀前半には脱植民地化という目前の課題のために〈戦い〉に関心が集中したが、ナショナリズムの本質は異質な他者を包摂した共同体の拡大にあると考えるならば、東南アジア各地の伝統的な共同体が国民共同体になり、さらに ASEAN 共同体に向かおうとしていることは、独立後の今日もナショナリズムの途上にあり、そこには常に越境性と混血性が伴うとする理解が可能になる。

アジアのナショナリズム研究では、留学などを通じて西洋文化に触れたエリートが西洋の近代的思想を取り入れて祖国の改革を志し、新聞・雑誌や小説などの印刷メディアを通じて同国人に改革思想を広めたと理解される。これは改革思想の起源に関しては重要だが、改革思想や同国人意識の伝播という点では十分ではない。例えば東南アジアで最も早く独立革命が起こったフィリピンでは、革命運動家ホセ・リサールの小説『ノリ・メ・タンヘレ』は多言語交じりのスペイン語で書かれ、内容が理解できる読者は限定されていた。これに対しイレートは、キリストの受難の生涯を描いた叙事詩『パション』の詠唱により反植民地主義の思想が共有されたと論じた。これは印刷メディアによらない革命思想の伝播を跡付けた優れた研究だが、多数派（タガログ語話者）を中心とする史観から脱していないとの批判にもうかがえるように、多様な背景を持つ人々を包摂する側面には十分に注意が払われていない。

２．研究の目的

映画は、1890 年代に発明され、20 世紀半ばには東南アジアの多くの国で大衆娯楽になった非文字メディアである。今日では映画の多くは国別・言語別に作られ、伝統芸能と切り離して見られがちである。しかし、フィリピンの映画以前のセナクロ（宗教劇）、コメディア（喜劇）、サルスエラ（音楽劇）の形式が今日のアクション映画や恋愛映画にも見られることや、マレーシアで愛国主義映画として名高い『ハッサン軍曹』（1957 年）の監督がフィリピン人であることにうかがえるように、かつて東南アジアでは域内各地の伝統芸能の形式や内容を織り込みつつ国を越えて影響しあって映画が製作・流通されていた状況が存在し、東南アジアに物語文化圏が形成されている（あるいは、複数の物語文化圏が部分的に重なり合い、それらが全体で東南アジアで 1 つの物語文化圏を形成している）と考えられる。

物語文化圏の成立過程においては舞台芸能（特に移動舞台）も重要な役割を果たしたと考えられ、東インドのコメディ・スタンブル、マラヤのバンサワン、フィリピンのセナクロ、コメディア、サルスエラなどの相互の影響も指摘されているが、国境を越えた相互の影響は映画において顕著である。研究代表者は映画・映像を通じた文化的介入に関する共同研究により、今日の東南アジアにおける映画の形式と内容の研究を国別に進めてきた。本研究はこれを踏まえ、さらに映画の製作・流通の国境を越えた広がりおよび形式と内容における映画以外のメディア（舞台芸能や文芸）との関係にも目を向けることで、東南アジアに広がる物語文化圏の存在を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

文献調査と関係者への聞き取り調査により、20 世紀前半のシンガポール／マラヤにおいて、①どのような出身と経歴を持つ人により、②どのような映画が作られ、③人々はどのような映画を見ていたのかを明らかにする。①ではインドネシアやフィリピンの出身者についてそれぞれの国でも現地調査を行う。②では越境性と混血性に留意するとともに、可能な限り作品を視聴し、舞台芸能や文芸の影響に特に注意する。③では当時の新聞を資料として調査を行う。また、マラヤ半島から東南アジア大陸部のタイ、ラオス、カンボジアに共通して見られる民間伝承「12 人姉妹」を対象に、現地協力者を交えたワークショップの開催により、20 世紀を通じて国ごとに物語の内容やメディアが変容しながら人々に受容されていく過程を明らかにする。

４．研究成果

1920 年代から 1930 年代にかけてのシンガポールで映画制作および映画に関連する記事や広告の執筆・制作に関わった人々について調査し、インドネシアで生まれてマラッカ海峡の両岸を国境を越えて往来していた人々の文筆活動を通じてマラヤ／マレーシア、シンガポール、インドネシアの映画を通じたナラティブが共有されている様子を明らかにした。

20 世紀初頭においては中国から東南アジアへの国際移住に伴い、移住の時期によって経済階層が異なる状況が見られ、旧移住者と新移住者の間でどのように社会を作るかが課題であり、それを反映させた映画が制作された。1950 年代に独立を迎えると、旧移住者と新移住者が国民となり、異なる民族の間でどのように社会を作るかに課題が変化し、それを反映させた映画が制作された。

大陸部東南アジア「12 人姉妹」に関して、仏教説話の色が濃い民間伝承の「12 人姉妹」は 20

世紀には学校の教科書に取り入れられたり絵本が出版されたりすることで国民の間に浸透した。映像化では、制作時に利用可能だった特撮技術などの限定のもとで、制作時の国際関係や社会状況の影響を反映した制作がなされており、監督を交えたワークショップによってその様子が明らかにされた。

大陸部東南アジアの仏教社会では親への恩が重要な価値であり、仏教説話の要素を取り入れた「12 人姉妹」は親への恩を基本的な価値としているが、20 世紀半ばにカンボジアやタイで制作された映画版「12 人姉妹」では、異民族との協和、正義・公正、個人の幸福の実現などの諸価値が子から親への報恩と葛藤する場面が盛り込まれている。

複数の国にまたがる物語文化圏で流通するナラティブを歴史的に検討することを通じて、映像メディアによるナラティブの流通が国民の範囲で共有される側面と、国民の範囲を越えて影響を及ぼしあう側面の両方があることが示された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 山本博之	４．巻 2018
２．論文標題 正義と忠誠の十字路：2018年のマレーシアにおける政権交代と映画	５．発行年 2019年
３．雑誌名 混成アジア映画研究2018	６．最初と最後の頁 8-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山本博之	４．巻 -
２．論文標題 フィリピンのゲイ・コメディ映画に投影された家族のかたち：ウェン・デラマス監督の 『美女と親友』を中心に	５．発行年 2018年
３．雑誌名 福岡まどか・福岡正太編『東南アジアのポピュラーカルチャー―アイデンティティ・国家・グローバル化』	６．最初と最後の頁 230-257
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山本博之	４．巻 2017
２．論文標題 フィリピン映画におけるゲイ・カップル表象	５．発行年 2018年
３．雑誌名 混成アジア映画研究2017	６．最初と最後の頁 34-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山本博之	４．巻 2016
２．論文標題 シンガポール映画『セブンレターズ』に見る「母としてのマレーシア」イメージ：「覚悟」から見る東南アジア映画論に向けて	５．発行年 2017年
３．雑誌名 混成アジア映画研究2016	６．最初と最後の頁 39-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山本博之	4．巻 2019
2．論文標題 フィリピン映画100年目に生まれる物語の新しい形	5．発行年 2020年
3．雑誌名 混成アジア映画研究2019	6．最初と最後の頁 50-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

1．著者名 山本博之	4．発行年 2019年
2．出版社 英明企画編集	5．総ページ数 480
3．書名 マレーシア映画の母　ヤスミン・アフマドの世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	篠崎　香織 (Shinozaki Kaori) (90573486)	北九州市立大学・外国語学部・教授 (27101)	
研究分担者	西　芳実 (Nishi Yoshimi) (30431779)	京都大学・東南アジア地域研究研究所・准教授 (14301)	
研究協力者	岡田知子 (Okada Tomoko)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	平松秀樹 (Hiramatsu Hideki)		
研究協力者	橋本彩 (Hashimoto Sayaka)		